◆「友情」による支援の継続を
～コープあいち
復興支援の旅

コープあいち
東日本大震災被災地支援担当
岩本　隆憲氏

現地に常駐し、半年近くたちますが、現地のニーズに変化が起きてきています。

岩手に来る団体の支援ツアーの多くは、作業をして帰っていくボランティア・ツアーです。そこには交流がありません。

民家の手伝いをすれば民家の方との交流はありますが、だいたいは一時的なものになってしまい、仲間同士の交流はあっても被災者との交流はあまりありません。

交流を作るには地元の支援団体が間に入って、力を貸していただくことが必要でした。

この間、コープあいちで行なってきたタオルのお届けでは、現地のボランティア団体の皆さんの協力が得られ、各地でコープあいちの支援メッセージを伝えてもらえたことで、被災された方との交流につながる変化が起きました。

そういう地元の支援団体とコープあいちがつながった協力関係を、地元の方々は「友情」と表現しています。

支援の旅、参加者の皆さん。

愛知から岩手へ　タオルがつないだ復興支援の旅

津波で深刻な被害を受けた岩手の気仙地区（大船渡市、陸前高田市、住田町）への復興支援に取り組むコープあいちは、10 月 28 日から 30 日にかけて、「『あなたがつなぐ復興支援』～愛知から岩手へ、往復 1,800km の旅～」を行ない、組合員 39 人が参加しました。

今回の旅では、碁石海岸（大船渡市）での清掃活動や仮設住宅への訪問を行ない、交流会も開催されました。

コープあいちでは、発災当初から炊き出し支援やタオルを贈る活動を行なっています。贈られた 23 万枚のタオルは、地元のボランティア団体である「椿の里・大船渡ガイド」の方が、避難所や仮設住宅の皆さんを訪ねて近況や要望を聞きながらお渡ししたことで交流が深まりました。

ガイドの会事務局長の佐々木典子さんは「被災者された方、コープあいちさん、そして、ボランティア団体のつながりをさらに強めて今後の支援に活かしたい」と話していました。（左欄にて関連記事掲載）

海藻やゴミを拾い集めるボランティアたち。

被災された方の話を、真剣な表情で聞く参加者。

「また、おいしいキュウリが食べたい！」

シャベルで泥をすくっていく。

かき出した泥が入った土のうが、ハウスの前に並ぶ。

10 月 22 日、宮城県石巻市の「めぐみ野※」キュウリ生産者である鹿野昭さんのビニールハウスで、復旧作業ボランティアが行なわれました。参加したのは、みやぎ生協職員とその家族、そして取引先業者の計 24 人です。鹿野さんは、震災以前は、700 坪もの面積で栽培を行なっていましたが、津波でハウスが押し流されました。

みやぎ生協では、6 月にも、ハウスにたまったがれきの撤去作業を行なっています。今回は、津波の影響で畑にたまった泥を、元の畑の土が出てくるまで 15cm ほど取り除き、土のう袋に詰める作業を行ないました。

キュウリの栽培には課題も山積です。津波で塩水化した井戸水はキュウリ栽培には使えません。設備投資費用の問題もあります。そこで鹿野さんは「塩害に強い小松菜などから栽培をはじめ、いずれはキュウリの栽培を再開したいです」と話していました。

※ みやぎ生協の産直ブランドの名称。